

moodle を活用した初中等日本語教師への 初級日本語研修と課題

ーインドにおける教師研修でのブレンディッドラーニングの試みー

竹村徳倫

[キーワード] ブレンディッドラーニング、moodle、e-Learning、初級日本語、教師研修

[要 旨]

国際交流基金ニューデリー日本文化センターでは、初中等教育機関の日本語教師の自主的な要請から日本語能力底上げのための教師研修を開始した。しかし、教師研修に毎回参加できる教師は全体のごく一部であり、教師研修に参加する時間のない教師や、遠隔地のために参加できない教師がいるなど、解決すべき問題もみられた。そこで、2012年2月から4月までの期間、同期的な対面式授業と、「moodle」上に配置した非同期的な e-Learning コンテンツを活用したブレンディッドラーニングによる教師研修を実施した。その結果、ブレンディッドラーニングが時間と距離の問題を解決するための一手段と成り得ることが示唆された。だが一方で、時間経過による参加者の moodle 利用離れ、参加者の e-Learning への適応問題、参加者間のインターアクションの促進の必要性、コンテンツの充実などの課題が明らかとなった。

1. はじめに

インドでは2006年から Central Board of Secondary Education (CBSE) といわれる教育委員会傘下の初中等教育機関で日本語教育が行われており、国際交流基金 (2009) によると、5,583名⁽¹⁾の児童・生徒が日本語を学んでいる。日本語導入から6年目にあたる2012年からは、最上級生の12年生 (日本の高校3年生に相当) でも日本語クラスが始まったが、生徒たちの進級と同時に日本語のレベルもあがり、日本語能力試験 (以下、JLPT) の N5、N4 レベルに合格する生徒が出始めた。

このような状況の中で、初中等教育における日本語教育では、現場の教師にも日本語能力の向上が求められるようになり、ニューデリー日本文化センター (以下、JFND) では、初中等教育機関の日本語教師の自主的な要請から JLPT 受験を目的とした日本語能力底上げのための教師研修を開始した。

しかし、JFND で行われる教師研修に毎回参加できる教師は全体のごく一部であり、仕事と家事に追われて教師研修に参加する時間のない教師や、遠隔地のためにデリーの教師研修に参加できない教師がいるなど、解決すべき問題もみられた。

この「距離」と「時間」の問題を解決し、より多くの初中等日本語教師が教師研修に参加で

きるような学習環境を作るために、2012年2月から4月までの期間、同期的な対面式授業と、学習管理システム^②（以下、LMS）「moodle」上に配置した非同期的な e-Learning コンテンツを活用したブレンディッドラーニングによる教師研修（全11回、うち1回は e-Learning コンテンツだけのクラス）を実施した。本報告では、教師研修での moodle へのアクセスデータと出席率をもとに、インドの日本語教師による moodle の利用実態の一例を示すことで、今後、インドの日本語教育現場で e-Learning を考える際の足がかりとしたい。

2. 先行研究

2.1 ブレンディッドラーニングについて

e-Learning と一口に言っても「自学自習コンテンツ」「電子掲示板を使ったディスカッション」「オンラインで提供される小テスト」「インターネットを通じた通信教育」など、さまざまだが、適切な管理のない状況で運用される e-Learning 教材は高いドロップアウト率や、時間経過による利用者の減少などが問題になっている（安達2007、池田2010）。そこで、近年では e-Learning の授業時間外の利用と対面授業を組み合わせた「ブレンディッドラーニング（以下、BL）」が注目されており、LMS を利用した BL が多く見られる。

Hearvey (2003) によれば、BL とは、相互に補足しあい、学習を促進するようデザインされた複数の媒体を複合させたもので、具体的には伝統的な対面式授業や live e-Learning などのイベントベースの活動と、自己管理による自主学习とを組み合わせたものであると述べている。

BL の実践報告は、高等教育を中心に多くみられる。益子ほか (2005) は、多忙な現職教師を対象とした夜間・遠隔大学院講義の中で、テレビ会議システムによる講義と LMS 上の講義事前学習活動、事後学習活動を組み合わせた BL を行っている。その中で益子ほかは、同時的な講義以外の時間にも講義への参画意識を持たせるために、LMS による非同期的コミュニケーションを活性化させるためのマネジメント方略とその実践について報告している。

安達 (2007) は、e-Learning を用いて授業時間外の予習・復習が可能な学習環境を提供することで学習効果を高めることを企図し、大学の講義型授業と授業で使用する PowerPoint などの掲示教材や議論や質問のための掲示板、小テストなどの e-Learning コンテンツを利用した BL の実践を行っている。その中で安達は、学習者の活動状況を明らかにするために、ログによる利用状況と授業後アンケートの結果をもとに分析を行い、BL の授業の特徴を表す因子の抽出と参加学習者の類型化を行っている。

日本語教育における BL の実践例としては、中溝 (2009) や池田 (2010) などがあげられる。中溝 (2009) は、大学での初級前半の日本語コースでの対面式授業と e-Learning コンテンツを利用した BL の実践報告を行っている。学習者の多くが、日本語の学習に多くの時間をさけない理系の研究生・大学院生であることから、e-Learning コンテンツは授業の予復習だけな

く、自律学習用の教材としても使用できるよう留意し、対面式の授業では学習者一人でも可能な学習活動を極力少なくするような BL のデザインを行っている。

池田 (2010) は、初級日本語学習者を対象としたコースにおける対面授業と e-Learning 教材とを利用した BL の報告の中で、e-Learning 教材の利用頻度が学習者の成績に影響を与えるとした上で、授業時間外の e-Learning 教材の積極的な利用が初級の語彙や文法知識の習得に関する学習効果の向上に関係があると指摘している。反面、学習者間で e-Learning 利用に差があることや、無秩序な使用が見られるなどの問題も指摘している。

2.2 moodle について

moodle はオーストラリアのカーティン工科大学の Martin Dougiamas 氏が開発したオープンソースのコース管理システムであり、BL を行う際の LMS として世界中で利用されている。moodle 上では教材のアップロード、小テスト、ニュース配信、成績管理、利用者間のチャット、利用者のアクセスログの閲覧などが行える⁽³⁾。

日本語教育において moodle の使用に触れた報告としては、前述の中溝 (2009) のほか、大学の日本語クラスの学習者に対し、初級レベルの漢字クラスでの使用を報告した山田 (2011) などがあげられる。

3. 実践内容

3.1 教師研修の概要

2012年2月10日から4月20日まで行った JFND での教師研修 B クラス (以下、教師研修) で moodle を導入し、対面式授業と非対面式の e-Learning コンテンツを用いた BL を行った。



図 1 : 教師研修のために作成した moodle の画面

そのうち、4月6日に行った第9回だけは、対面式授業を行わず、e-Learning コンテンツだけのクラスとした(図1は教師研修のために作成した moodle の画面)。

参加者は中等教育の日本語教師9名(女性6名、男性3名)であった。参加者のほとんどは旧 JLPT の3級、または N4 レベルの合格者であったが、すでに N3 に合格している参加者も2名いた。

教師研修のレベルについては、生徒に N4 レベル合格者が出たことで、中等日本語教師は N3 レベル以上の日本語能力が求められるようになったことや、今回の教師研修に先立って行われた中級レベルの研修で初級レベルの文法項目、漢字が未定着のままになっている参加者が多く見られたことなどの理由から、初級レベルの文法・漢字の復習を扱うことにした。

漢字は初級レベルの漢字を300個扱い、文法は特にまちがいが多いものを中心に選定し、研修期間内ですできるだけ多くの内容をカバーできるように心がけた。また、対面式授業内での会話・作文は可能な限り、その日の文法項目と関連があるものを設定した。教師研修で扱った文法の学習内容、作文・会話のトピックは表1のとおりである。

表1：教師研修の内容

授業回	文法の学習項目	作文・会話のトピック
第2回 2/17	比較の言葉(～より、ほうが、～すぎます など) 原因や理由、逆接を表す言葉(～のに、～ので、～し、～ために など)	身近なものを比べる理由を言う
第3回 2/24	～ところですが、～ばかりです 経験を表す言葉(～たことがあります など) 開始・終了を表す言葉(～つづけます、おわります など)	自分の日本語学習の経験を話す
第4回 3/2	可能動詞、Vることができます など 目的(～ために、～ように、)～てほしいです、～ないでほしいです	現在の自分の話と 将来の希望について話す
第5回 3/9	様子を表す言葉(～そうです、～をしています など) ～のようです、～らしいです、～のような…	身の回りの様子や状態について言う
第6回 3/16	変化を表す言葉(～ようになります、～なくなります、～てきます、～ていきます)～のです など	身の回りの変化について話す・理由を説明する
第7回 3/23	推量(～だろうと思います、～らしいです、～はずです、～ようです) 使役 など	自分の学校の子どもたちについて述べる
第8回 3/30	受身・使役受身の文	大変だった経験について話す
第9回 4/6	意思(～ようと思います、～つもりです、ようにします など) 決定(～にします、～ことにします、～になります など)	夏休みの予定についての作文
第10回 4/13	条件(～と、ば、たら)	仮定の話をする
第11回 4/20	条件(なら など)	条件を使った複文をつくる

*第9回は対面式授業はなく、e-Learning コンテンツだけのクラス

参加者の多くが先述の距離と時間の問題を抱えていることから、e-Learning コンテンツは中溝(2009)を参考に、授業に参加できなくても、それだけで自主学習用の教材として完結するようにした。それに対し対面式の授業では、参加者の授業への積極的な参加につながるよう、会話や作文など、研修担当者とともに行った方が効果的だと思われる活動を多く行った。各クラスは図2のような流れで行った。

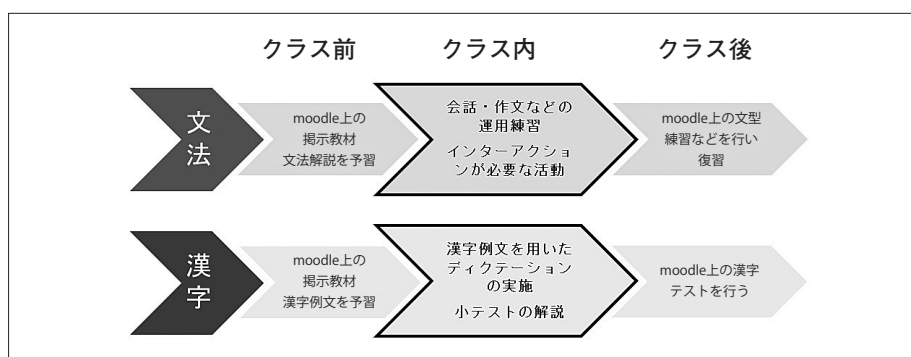


図2：教師研修のながれ

参加者はまず、授業前に moodle 上にアップロードされた、授業で扱う文法項目、漢字などの掲示教材を参照する。その後、授業時間内では会話などの運用練習を中心に行い、授業後は moodle 上の掲示教材や小テストを利用し、授業の復習のための活動を行い、小テストの受験や課題を提出することで教師からのフィードバックを得られるようにした。以下、対面式授業と e-Learning コンテンツの詳細について述べる。

3.2 対面式授業について

対面式授業は毎週1回、2時間の授業を行った（前半1時間、後半1時間）。復習という今回の研修の性格上、原則として文型・漢字の導入は行わず、ディクテーション、会話、短作文などの練習を多く行った。前半はまず、漢字のディクテーションを行い、参加者にホワイトボードへ漢字の文を記入してもらった上で、全体で確認を行った。その後クラス前にアップロードされていた漢字リストについての質問を受け、漢字の用法などの解説を行った。後半は、文法の掲示教材と同じスライドを使いながら、参加者からの質問確認、重要点の解説などを行った後、ターゲットとなる文法項目を用いた会話や作文練習などを行った。

参加者の中には個人で利用できるインターネット環境が十分に整っていない者も見られたため、希望者には印刷したスライドを配布した。また、全ての参加者が moodle を使用した経験がなかったため、第1回と第2回のクラスで moodle の使用法および BL についてのガイダンスを行った。

3.3 e-Learning コンテンツについて

今回 moodle 上に配置した e-learning コンテンツは以下のとおりである。moodle 上の e-Learning コンテンツは、研修終了後も参加者が自由にアクセスできるようにした。

① 掲示教材

文法項目については、図3のように対面式授業内で取り扱う文法項目についての解説、例文を PowerPoint のスライドにまとめ、事前に参照・印刷できるように準備をした。また、文法項目のスライドは、それだけでも文法学習用の参考資料として自主学習に使用できるような構成にした。

漢字については図4のように漢字語彙とその例文に振り仮名を振ったリストを用意し、印刷後、意味の部分は自分で調べて書き込めるような形にした。

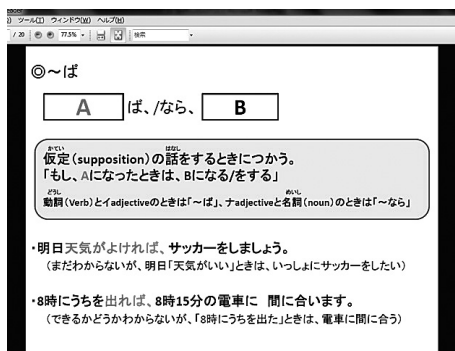


図3 掲示教材 文法解説

	言葉	意味	例文
1	世界		世界には 190以上の国がある。
2	開金		ロンドンオリンピックの開会式を見に行く。
3	開通		外口が 開通して デリー市内の 移動が 便利になった。
4	開く		このビンのふたは かたくて なかなか開かない。
5	開く		扉を 自動で 開く。
6	開ける		窓を 開けると 暑が入ってくるので 開けないほうがいい。
7	～階		この建物の 2階には 5Fの 事務所がある。
8	～外		今週末は 国外へ 出張するので デリーには いない。
9	外国		外国へ 行く時は パスポートが 必要です。

図4 掲示教材 漢字例文

② 文型練習

moodle の「小テスト」機能の作文問題を利用し、その日のクラスであつかった文法項目について文章の空欄を補充する完成法の練習問題を用意した (図5参照)。作文は moodle 上で提出することができ、担当教師は提出された作文をチェックし、フィードバックを行った。

5 点
 得点: _____ は、_____ のような _____ を _____。
 0.6/1

答え: 私 映画館 大きテレビ 買ようと思っています

コメント: 私は、映画館のような大きテレビを買ようと思っています

×大きテレビ→大きいテレビ
 ×買よう→買おう

「映画館のようなテレビ」だと、映画館の建物の形をしたテレビになってしまうので、映画館のスクリーンのようなテレビの方がいいでしょう。

モデル文
 私は 映画館のスクリーンのような大きいテレビを買おうと思っています。
 コメント作成または評点を上書きする

部分的に正解
 この解答の評点: 0.6/1 この解答にペナルティはありません。

解答履歴:

#	操作	解答	時間	得点状況	評点
1	閉じる	私 映画館 大きテレビ 買ようと思...	12/03/ 11 00:24:37	0	0
2	手動評定	私 映画館 大きテレビ 買ようと思...	12/03/ 12 17:42:12	0.6	0.6

図5 文型練習用コンテンツ

③漢字小テスト

moodle の「小テスト」機能の多肢選択問題を利用し、JLPT の文字・語彙試験の出題形式に合わせ、「読み」、「表記」、「文脈規定」、「言い換え類義」の四択問題を作成し行った (図 6 参照)。出題する漢字語彙は掲示教材の漢字リストに準じ、あらかじめ範囲を指定したうえで、問題文も漢字リストのものと同じものを使用した。小テストは参加者が答えを送信すればすぐに採点され、また複数回の受験も可能である。

1 題 書類(しよるい)に生年月日を書いてください。
 得点: 1/1
 1つの答えを選択してください。

- a. しょうねんげつひ ×
- b. せいねんがっぴ ✓
- c. しょうねんがっひ ×
- d. せいねんつきひ ×

コメント作成または評点を上書きする

正解
 この解答の評点: 1/1

解答履歴:

#	操作	解答	時間	得点状況
1	評定	せいねんがっぴ	12/03/7 15:15:47	1
2	閉じる&評定	せいねんがっぴ	12/03/7 15:16:17	1

2 題 おじいさんが事故(じこ)の様子(ようす)をかたつてくれた。
 得点: 0/1
 1つの答えを選択してください。

- a. 調って ✗
- b. 語って ✓
- c. 話って ×

図 6 漢字小テスト用コンテンツ

④その他のリソース・WEB サイト

moodle を使用したことのない参加者のために、ログインの方法や、e-Learning コンテンツの使用法などをまとめた PowerPoint のスライドを作成し、moodle 上で随時閲覧できるようにした。また、上記のコンテンツのほかに、授業中に作文の課題が終わらなかった場合、必要に応じて moodle の「課題」機能を使用し、moodle 上からも提出できるようにした。さらに外部のリソースとしては日本語読解学習システム「リーディングチュウ太⁽⁴⁾」へのリンクを moodle 上に配置し、moodle 上の e-Learning コンテンツで読めない漢字やわからない語彙があった場合、すぐに検索ができるようにした。

4. 対面式授業への出席率および moodle の利用状況

今回行った教師研修での e-Learning コンテンツの利用状況を調査するために、アクセス数と提供したコンテンツの表示数を中心に述べる。また、対面式授業については、授業への出席

率について述べる。

今回の教師研修での各参加者の出席率は表2のとおりである。対面式授業への参加の難しさについてはすでに述べたとおりだが、基本的に参加者全員が授業でそろうことはなく、毎回時間を作ることができた参加者が研修のために集まってくるという状況であった。IJT5は参加を表明し、moodleのIDは取得したものの、結局対面式授業へは一回も参加することがなかった。

表2：対面式授業の出席率

参加者名	IJT 1	IJT 2	IJT 3	IJT 4	IJT 5	IJT 6	IJT 7	IJT 8	IJT 9
出席率(%)	80	30	60	50	0	10	50	70	30

*IJT5は対面式授業に出席せず。

表3：moodleへの総アクセス数

参加者名	IJT 1	IJT 2	IJT 3	IJT 4	IJT 5	IJT 6	IJT 7	IJT 8	IJT 9	合計
アクセス総数	409	365	418	247	58	32	18	0	0	1547

*IJT8、IJT9はmoodleにアクセスせず。

moodleへのアクセス総数は表3のとおりである。IJT8とIJT9はmoodleのIDは取得したものの、結局moodleにアクセスすることがなかった。moodleへのログインを行った7名の参加者内でも、IJT1、IJT2、IJT3、IJT4とIJT5、IJT6、IJT7との間ではアクセス数に大きな差が見られた。この点から、インターネットを使用するmoodleに対する学習者の姿勢に大きな差があることが見て取れる。各コンテンツの表示数は、図7ようになった。

図7のグラフは縦軸が授業回数と各授業回に対応したe-Learningコンテンツ名で、横軸がコンテンツの表示回数である。また、グラフは各参加者がコンテンツを表示した数の合計となっている。e-Learningコンテンツの表示数にとくに注目した理由は、小テストなどのコンテンツは内部の操作によってアクセス数が多く計上されるため、操作の必要のないコンテンツとの比較が難しくなると考えられたからである。

各e-Learningコンテンツ表示数の合計については、前半クラス第6回までの表示数と、第7回以降の表示数との間に大きな差が生じた。当初、定期的にコンテンツを表示していたIJT2とIJT4がクラス第6回を境にコンテンツを表示しなくなるなど、この時期を境に参加者のコンテンツ表示数が明らかに減っていることがわかる。また、総アクセス数が少なかったIJT5、IJT6、IJT7は教師研修の初期の段階に1、2度moodle内のコンテンツを表示しただけで、その後はまったくコンテンツを表示しなくなってしまった。

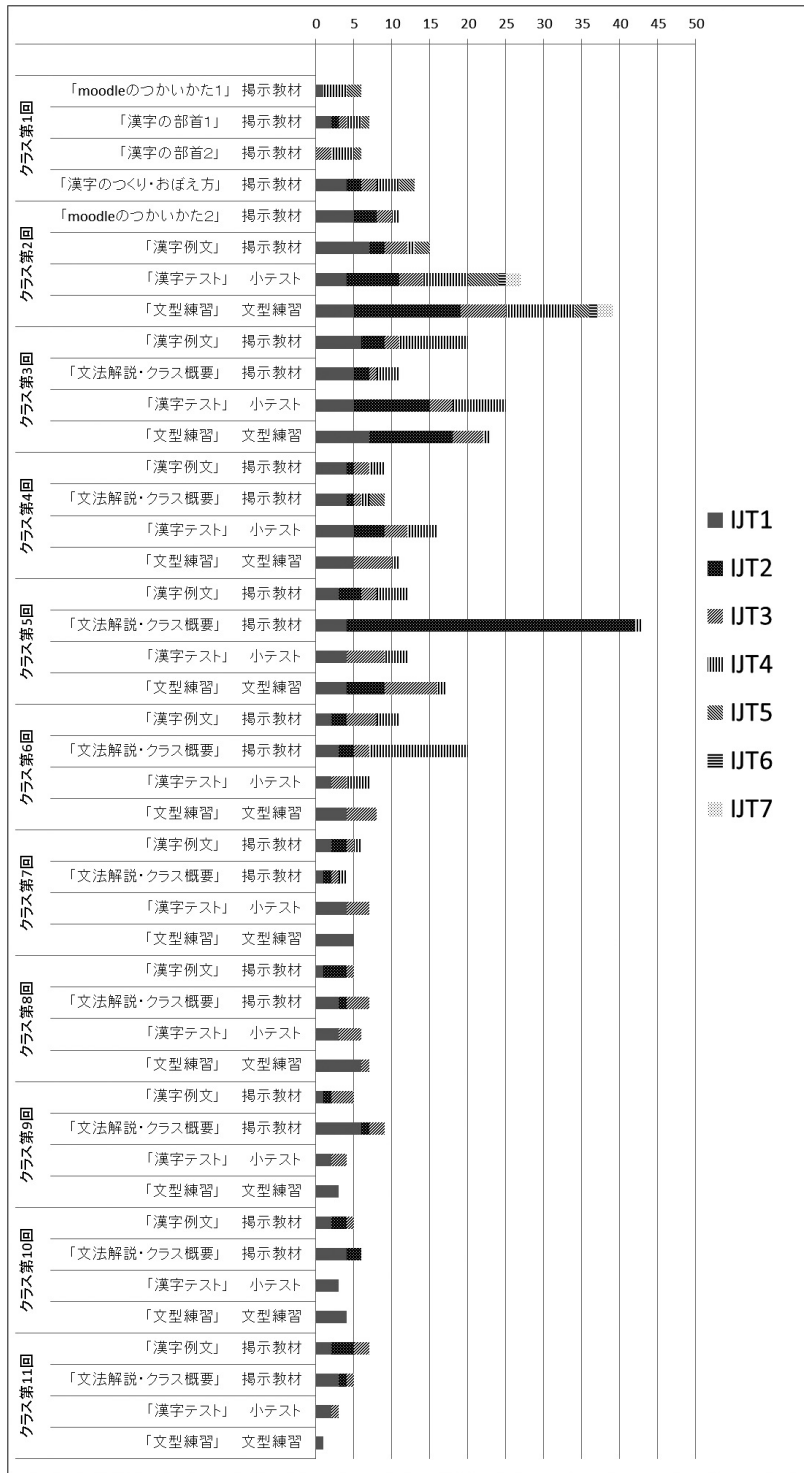


図7 e-Learning コンテンツの表示数

また、参加者によっては、教師研修を通じて各コンテンツをバランスよく表示している参加者と、特定のコンテンツを集中して表示している参加者がいることも見て取れる。例として IJT 1 と IJT 2 の表示数を比較すると、IJT 1 は毎回定期的かつ均等に各コンテンツを表示しているのに対し、IJT 2 は文法に関するコンテンツを集中して表示しており、とくにクラス第5回の「クラス概要・文法解説」の掲示教材は合計で30回以上表示している。逆に漢字例文や漢字テストといったコンテンツは前半こそ、表示することはあるものの、後半はほとんど表示していないことがわかる。

また、コンテンツの性格による差については、「クラス概要・文法解説」や「漢字例文」などの掲示教材の表示数が他のコンテンツに比較して多く、表示数が格段に落ちたクラス第7回以降でもある程度の表示数があった。これに対し、「漢字テスト」や「文型練習」のようなコンテンツは後半に入って表示数が大きく減っている。

5. 考察

上記の対面式授業の出席率と moodle の利用状況から以下のことが推察された。

①回数を重ねると同時に、moodle へのアクセスが減っていく。

時間の経過とともに利用者が減っていくという現象はすでに他の研究報告でも見られていたことだが、今回の教師研修でも第6回を境に e-Learning コンテンツの表示数が減少した。この理由としては「教師研修の内容が単調であることによる学習者の意欲低下」、「授業を欠席することによる研修離れ」、「当初は目新しかった moodle に慣れてしまった」「moodle は難解すぎて歯がたたなかった」といったものが想起される。

いずれの理由にせよ、そのような状況に陥らないよう、あらかじめコースデザインを行うことと、研修期間中も参加者への動機づけを継続的に行う必要があると思われる。

② moodle を全く受け付けなかった参加者がいた反面、積極的に利用していた参加者もいた。

参加者全員が moodle に接するのが初めてであったため、教師研修開始に際しては2度のガイダンスを行うなどの工夫をしたにもかかわらず、まったく moodle にアクセスしなかった参加者が見られた。この理由としては IT リテラシー能力や、学習スタイル、IT 環境などの複合的な要因が考えられる。一方で、moodle に積極的にアクセスし、自分の日本語学習に取り入れるなど、BL での教師研修への適応を感じさせる参加者も見られた。

今後はこれらの参加者の行動や学習スタイルの調査を行うことによって BL での教師研修を効果的に行うために有益な情報が得られると考えられる。

③ moodle の利用法も学習者によってさまざまである。

②とも関連することであるが、クラス毎に moodle にアクセスするという当初計画していた利用法で moodle を利用する IJT 1 のような参加者がいた一方で、自分の学習したい項目を集中的に利用する IJT 2 のような参加者が見られるなど、moodle の利用法も学習者によってさまざまであることがわかった。これは本研修の e-Learning コンテンツを自主学習のために使えるようデザインしたことが遠因にあると考えられるが、時間と距離の問題を解決するための e-Learning コンテンツを考える上で、自主学習教材としても使用できる e-Learning コンテンツの存在は非常に重要であると思われる。

④コンテンツによっては参加者が利用しやすいものとそうでないものがある。

今回の教師研修では掲示教材のような、閲覧するだけの e-Learning コンテンツの表示が比較的多かった反面、漢字小テストや文型練習のようなコンテンツは表示数が伸びなかった。この理由のひとつとしては、これら 2 つのコンテンツが掲示教材に比べ操作が煩雑であるということが考えられる。とくに今回の研修のような BL ではいくつものインターアクションを要する高度な作業は対面式授業でも行うことができるため、とくに e-Learning に不慣れな参加者が多い場合は e-Learning 部分は可能な限り簡便な作業を心がけるとすることも重要だと考えられる。

6. まとめと今後の課題

今回の教師研修から BL を行うことのさまざまな利点、課題が明らかとなったが、本章ではとくに JFND で BL での教師研修を行った意義と今後の課題について述べる。

BL での研修を実施した意義としてはまず、教師研修の時間と距離の問題を解決する糸口をつかむことができたことがあげられる。結果的に手放しに成功とは言えない今回の教師研修ではあったが、今後 BL を行う上での貴重な情報を数多く得ることができた。

これまで時間の問題や距離の問題で研修になかなか参加できず、コンタクトが途絶えがちになっていた教師が、moodle を利用したことで JFND との関係を保つことができるようになったことも大きな収穫である。また、全体の一部ではあるが、数名の参加者が BL の特徴を理解し、研修に参加したことは、BL での教師研修の今後に期待を感じさせるものであった。

課題としては、まず、参加者をいかに moodle にひきつけるかということがあげられる。上述のように、今回の研修は第 6 回を境に moodle へのアクセスが大幅に減少してしまった。この対策としては、参加者を飽きさせない工夫、moodle 利用の意識化といったことを効果的に行うための方法を考える必要があるだろう。

つぎに、BL での研修のコンセプトを理解してもらうのに予想以上に時間がかかったことが

あげられる。とくに moodle は、インドの初中等日本語教育の教師にとってはなじみのないものだったようで、研修の終了を迎えても、全員が moodle を使いこなすまでに至らなかったのは今後大いに改善、検討をすべき点である。

また、今回の BL での教師研修では、参加者間のインタラクティブなアクションを促す「掲示板」を活用できなかったことも大きな課題である。初級文法と漢字の復習という今回の教師研修の特徴上、参加者間の交流という点については特に留意しなかったが、対面式授業を行うにつれて、参加者間の交流が活発になっていくのが感じられた。結果的に有志の参加者同士が個人的にメールで授業の情報交換などを行っていたようだが、個人が自らのペースで課題をこなすことができればそれでよいと考え、moodle 内での参加者の交流を促進しなかったのは反省すべき点であった。

さらに、moodle 上で扱うコンテンツの種類が少ないことも課題の一つである。今回の教師研修では文法と漢字を扱ったが、この2つの e-Learning コンテンツを準備するだけでもかなりの手間と時間がかかってしまった。また教材の質についても十分なレベルに達していないものが少なからずあったと思われる。参加者からは読解や聴解コンテンツに対する要望もあったが、著作権や JLPT 過去問の取り扱いの難しさから現時点では実現が難しいという問題も見られた。

このようにまだまだ解決すべき課題の多い JFND の BL 対応の教師研修ではあるが、インドという広大な国土を持つ国においては、e-Learning は欠くことのできないものであるため、今後も継続して実施していく必要があると考える。

謝辞

本報告を執筆するにあたって、データ提供を快諾してくださった先生方に深く感謝いたします。また、本研修を開始、運営するにあたって助言をくださった伊勢田涼子日本語シニア専門家ならびに徳間望日本語専門家、そして教師研修のために協力してくださった国際交流基金ニューデリー日本文化センターのスタッフのみなさまに厚く御礼申し上げます。

〔注〕

^①初等教育、中等教育、複数段階教育の学習者数の合計人数。

^②Learning Management System、e-Learning の実施に必要な学習管理のためのシステムで、成績管理、教材の保管、教材配信、試験の実施などコース運営に必要な作業が行える。

^③moodle の詳細についてはオンラインドキュメント「moodledocs」

<http://docs.moodle.org/2_x/ja/Moodle%E3%81%A8%E3%81%AF>を参照。

^④東京国際大学の川村よし子先生が開発した『日本語読解学習支援システム Reading tutor』。詳細は<<http://language.tiu.ac.jp/>>を参照。

〔参考文献〕

- 安達一寿 (2007) 「ブレンディッドラーニングでの学習活動の類型化に関する分析」、『日本教育工学会論文誌31』、29-40
- 池田伸子 (2010) 「ブレンディッドラーニング環境における eラーニングシステム利用の効果に関する研究-立教大学初級日本語コースを事例として-」『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要2』、1-12
- 国際交流基金 (2009) 『日本語教育調査・2009年海外の日本語教育の現状』、独立行政法人国際交流基金
- 中溝朋子 (2009) 「留学生のための日本語初級 e-Learning 教材の開発と課題」『大学教育6』、119-126
- 益子典文、松川禮子、加藤直樹、村瀬康一郎 (2005) 「働きながら学ぶ現職教師のための遠隔講義における学習のマネジメント」『日本教育工学会論文誌29』、141-144
- 山田智久 (2011) 「LMS を用いた日本語教育プログラムの試み-初級漢字クラスでの実践から-」『佐賀大学留学生センター紀要』10、41-54
- Hearvey,S. (2003) Building Effective Blended Learning Programs.Educational Trechnology, 43 : 6, 51-54